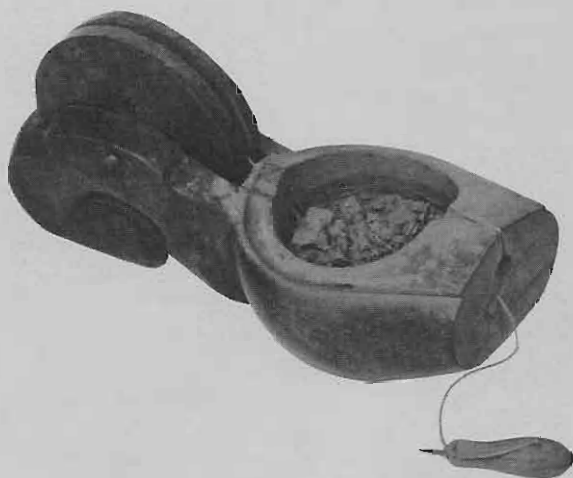


木工具・使用法

機能・種類・仕立て・使い方

秋岡芳夫 監修
吉見 誠 述



序

輒近我國諸産業の發展は各種工業の振興を來し、生活文化の向上は諸加工々業即ち工藝的産業の隆盛を見るに至つた。從來我國の衣食住に關する資料は、建築を始めとして、日常生活に必要な家具調度の類に至るまで、これが材料を多くは木材に求めた爲め、古來我國の木工技術の精巧なることは、既に世界的にその名聲を博してゐるところである。然るに近來發達したる各種新興工藝技術に比すれば、木工の技術はその古き傳統のみを固守するためか、やゝもすれば時勢の進運に遅るゝの感がある。これは斯業に携はる者の多くが、徒らに技巧の枝葉にのみ走り、その根本たる工具類の改良、製作法の研究、經營法の合理化等を怠り、時代文化の向上進歩に順應するの用意を缺くためではあるまいか。例へば我國古來の木工具は刃物の鋭利にして切味の輕快なることは、一般に洋風工具のそれに優れるも、その使用法に相當の熟練を要し、これが會得に長年月を要するが如きは、寧ろ洋風工具の各種のゲージ又は定規類その他の調節装置を巧みに利用し、或は新材料新工夫によりて、比較的初心者にも容易に使用し得られる如き點を學び、以て現代の複雑なる經濟機構に處するの努力が大切であらう。

而して最近我國都鄙を通じて工藝的産業旺盛となり、爲めに木材工藝界も次第にその研究盛んとなりつゝあるは、吾々斯界に關心を有する者の同慶に堪えないところである。一方今まで知的教育にのみ遍して、精神教育にやゝもすれば缺くところの多かつた、初等又は中等普通教育の弊を、手工又は作業教育による技巧或は勞働體驗によつて補はんことに當局が注意されたことは、既に諸外國に於いて古くより實施されつゝあつたことで、その成果たるや吾々日常これを實際に經驗する者の同感するところである。又これ等の科目を實地に課するに當つては、各種の條件より木工作業が、この目的に最も適當なるため、諸外國とも、これが目的に木工を採用してゐる有様である。

斯の如き現況に於いて、適切な木工具の使用法又は手入法等の取扱ひに關する良参考書尠なく、爲めに實際斯業に従事する者を始めとして學生・生徒或はこれが技術指導者の共に研究に不便を感じつゝあるに鑑み、敢えて本著を公にする次第である。然しながら木工具の種類は他の工具類に比してその種類極めて多く、限られた紙數でこれを盡すことの至難なことは言ふまでもないが、本著はこれ等のものゝ中で、その主要なものについて説述したものである。著者素より淺學非才その要を得ざる點も多いと思ふが、幸に江湖の諸教示を得ば他日版を改めてその責を果さんことを期する次第である。

本著は木工具中最も種類多く且つ最も多く使用される、建具・家具・指物用木工具を中心として、大工用・小細工用又は彫刻用その他一般の木工具に就いて説述したものである。用語は各地方によつて異名あるものであるが、大體東京地方のものを標準として採用した。寸法は舊來の尺貫法とメートル法を併用した。

本著は一般木工業に従事する者のために参考書として説述したものであるが、又各實業學校の建築科・木材工藝科又は家具科の生徒或は小學校・中等學校等の手工科・作業科の参考書又は教科書として適當なものであると思ふ。

終りに本著の執筆に當り、挿圖その他に助力を願つた僚友小栗吉隆君及び各種の資料蒐集に多大の便宜を與へられた藤田吉兵衛氏その他の諸氏の好意に感謝する。

(原著より原文のまま収録) 吉見 誠

木工具を伝えるために

明治の始め、横浜、神戸などに外国人が移り住むようになって、彼等が本国から運んだ様式家具の修理から、日本の洋家具がつくり出されるようになった。原著者の吉見誠（1881年～1952年）は、洋家具の初期に東京芝に開店した杉田屋に入ったのが18才の時であった。当時の家具は、その様式に沿った面取や木彫が施されていることから、本書も溝鉋や面取鉋、のみ、彫刻刀の項は特に詳細に亘っていることで理解できよう。木彫は後藤派を学んでいるし、その仕事の一面では、赤坂離宮（迎賓館1909年完成）の家具・装飾に永年に亘って盡力した。1909年東京府立工芸学校が築地（東劇の位置——現東京都立工芸高校一水道橋）に開校されると同時に推挙され、木材工芸科の工芸品分科の教諭となり永年学生の育成に当たった。

原著の発行については、それまで木工具の教科書として概要を示すものはあったが、これほど詳細に亘って、体験を通して書かれたものはない。刊行までが丁度私の在学中であり、その発行後、教科書として最初の講義を受けたし、その後助手として、この書の行間にある技法を学ぶことが出来たことは幸であった。挿図は高等工芸学校（現千葉大工学部）卒業後、商工省工芸指導所を経て、同校木材科の製図担当の教諭となった小栗吉隆であり、当時としても斬新で明快なイラストレーションである。この原書の作成に当っては、木工具匠藤田吉兵衛に負うところもあるが、進行中よく両氏が論議をしていたことを私は想いおこす。

木工具がほぼ現在の形に定着したのは、江戸中期であるとされている。著者の職種から大工職専用の工具は記載されていない。建具、家具、指物用工具が中心となっている。日本の木工具は、自ら仕立てなければ木工具にならない。その基準を伝えているのが本書である。

専門学校桑沢デザイン研究所教授

(社) 日本インダストリアルデザイナー協会理事

金子 至

目次

第1編●工作台

第1章 立作業用工作台	12
第2章 座業用工作台	13
第3章 長物削台(ながものけずりだい)	14
第4章 工作台使用上の注意	14
第5章 木工用万力	15

第2編●尺度と定規

第6章 尺度	20
第7章 曲尺(きょくじゃく)	20
第8章 巻金(まきがね)	22
第9章 直角定規(スクエヤー)	23
第10章 斜角定規	24
第11章 留(とめ)定規と生留形と箱留形	25
第12章 下端(したば)定規	26

第3編●墨芯と墨壺

第13章 墨芯(すみさし)	30
第14章 墨壺	30

第4編●鋸

第15章 鋸の機能と種類	38
第16章 縦挽鋸(たてびきのこぎり)	39
第17章 横挽(よこびき)鋸	41
第18章 両刃鋸	43
第19章 胴付(どうつき)鋸	43
第20章 杓(ほぞ)挽鋸	44
第21章 畔(あぜ)挽鋸と鴨居挽鋸	45
第22章 釘挽鋸	46
第23章 押(おさえ)挽鋸	47
第24章 穴挽鋸	47
第25章 廻(まわし)挽鋸	48
第26章 溝突鋸と逃挽鋸	50
第27章 南京鋸	51
第28章 弦架(つるかけ)鋸	52
第29章 糸鋸	53
第30章 鋸の目立と目立鑿(やすり)	54

第5編●鉋

第31章 鉋の機能と種類	66
第32章 鉋台の材料と構造	68
第33章 鉋身	70
第34章 鉋の仕込勾配	71
第35章 鉋刃の研磨	73

第36章	平 鉋	76
第37章	台直鉋と鉋台の直し方	79
第38章	鉋削の方法	82
第39章	際 鉋(きわがんな)	86
第40章	溝(みぞ)鉋	88
第41章	脇(わき)鉋	94
第42章	面取鉋	95
第43章	円 鉋	101
第44章	反台(そりだい)鉋	101
第45章	南京(なんきん)鉋	102
第46章	小鉋類	103
第47章	組子削(くみこけずり)鉋	106
第48章	セメ鉋	106
第49章	擲面(なぐりめん)鉋	107
第50章	地透(ちすき)鉋	107
第51章	隅円削(すみまるけずり)鉋	109
第52章	大 鉋	109
第 6 編 ● 罨引と白罨引		
第53章	罨引の機能と種類	116
第54章	筋(すじ)罨引	116
第55章	割(わり)罨引	120
第56章	鑿(のみ)罨引	121
第57章	鎌(かま)罨引	122
第58章	溝罨引	122
第59章	鉛筆罨引	123
第60章	白罨引(しらけひき)	125
第 7 編 ● 鑿と小刀		
第61章	鑿の機能と種類	134
第62章	鑿の構造と各部の名称	134
第63章	追入鑿(おいののみ)	137
第64章	向待(むこうまち)鑿	138
第65章	厚(あつ)鑿	139
第66章	円(まる)鑿	139
第67章	鎌(かま)鑿	140
第68章	銛(もり)鑿と底溝(そこさらい)鑿	141
第69章	鐔(つば)鑿	141
第70章	薄 鑿	142
第71章	鎚(しのぎ)鑿	142
第72章	突(つき)鑿	143
第73章	鋲(こて)鑿	144

第74章 打抜(うちぬき)鑿	144
第75章 彫刻鑿	145
第76章 小道具	147
第77章 彫刻刀	149
第78章 剗小刀(くりこがたな)	152
第8編●槌類	
第79章 玄能	156
第80章 金槌	156
第81章 木槌	158
第9編●錐	
第82章 錐の機能と種類	160
第83章 揉錐(もみざり)	160
第84章 手錐と打込錐	162
第85章 螺子(ねじ)錐	163
第86章 貝形錐	163
第87章 繰子錐(くりこざり)	164
第88章 ハンドドリル	167
第89章 自動錐	168
第90章 轆轤(ろくろ)錐	168
第91章 胡弓(こきゅう)錐	168
第10編●砥石類	
第92章 砥石	170
第93章 金盤	171
第94章 金剛砂砥と油砥	171
第11編●斧類	
第95章 斧	174
第96章 鉞(なた)	174
第97章 鉞(ちょうな)	174
第12編●雑類	
第98章 釘抜類	176
第99章 木ネジ廻とネジ廻	177
第100章 締付具	177
第101章 硝子切(がらすきり)	179
第102章 木鑿(きやすり)	179
第103章 釘締(くぎしめ)	180
第104章 金床	180
第105章 水平器と板下(ふりさげ)	180
第106章 焼絵器	180
第107章 膠着用具	181
第108章 薄板練付用具	181

木工具・使用法

機能・種類・仕立て・使い方

秋岡芳夫 監修
吉見 誠 述

監修者紹介

秋岡芳夫 (あきおか・よしお)

大正9年 熊本生れ

東京高等工芸学校 (現・千葉大学工学部) 卒

現在：工業デザイナー、グループモノモノ主宰

クラフトセンタージャパン常任理事

東北工業大学主任教授

著書：日本の手道具 (創元社)、暮しのデザイン (新潮社)、木工一道具の仕立一 (美術出版社)、日本人のくらし一木・住・創 (玉川大学出版部) ほか多数。

原著者紹介

吉見 誠 (よしみ・まこと)

明治14年 岐阜県生れ 昭和27年没

18才で上京、東京市芝の洋家具屋の草分けである「杉田屋」に勤務。日露戦争を経て当時開校したばかりの府立工業学校の木材工芸科にむかえられ、終身教鞭をとる。

本書・木工具使用法は昭和10年の発行である。

木工具・使用法—機能・種類・仕立て・使い方—

©昭和55年4月1日第1版第1刷発行

昭和55年8月20日第1版第3刷発行

監修者 秋岡 芳夫

原著者 吉見 誠

発行者 矢部 文治

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 創元社

大阪市北区西天満1丁目4番2号 〒530

電話 06(363)2531

振替口座 大阪57099

東京支店 東京都新宿区山吹町77番地 〒162

電話 03(269)1051

落丁・乱丁の節はおとりかえ致します。

0072—730141—4202

検印省略

本器具使用法

機能。仕立て
種類。使い方

秋岡芳夫

監修

吉見

誠述

創元社